

『太平記』卷三の構成と方法

谷 垣 伊 太 雄

—

『太平記』卷二に於て「虚像」化してしまつた^(注1)とさえ見られた後醍醐天皇は、大塔宮の指示に従う形で京都を脱出し南部へ逃れた。これは聖尋僧正のいる東大寺東南院を臨幸の場所に予定しての脱出行であつた。しかし、同じ東大寺でも西室の顕実僧正は「關東ノ一族ニテ、權勢ノ門主タル間、皆其威ニヤ恐レタリケン、與力スル衆徒モ無」かつたため、ここを断念し、翌日「和東ノ鷲峯山」に入る。ところが「此ハ余リニ山深ク里遠シテ、何事ノ計畧モ叶マジキ處」であつたので、翌二十七日(元弘元年八月)「笠置ノ石室へ臨幸」と変更されたのであつた。

「和東ノ鷲峯山」というのは、役小角が草創し泰澄が再建した山岳道場の金胎寺を指すと考えてよく、又、「笠置ノ石室」は、大友皇

子が弥勒石仏を刻む目印に藁笠を置いたとの伝承^(注2)をもち、良弁僧正や日藏上人らの関与をも伝える修験道の靈場・笠置山の笠置寺と考えてよい。すなわち、阿新の危地を救う場面でも見られたが、やがて語られることとなる熊野・吉野を含めて、後醍醐天皇方が依拠するものとしての修験山伏の存在・勢力を無視できない事を暗示する脱出劇ではあつた。

こうして始まる卷三の章立ては次の通りである。^(注4)

- 一、主上御夢事付楠事
- 二、笠置軍事付陶山小見山夜討事
- 三、主上御没落笠置事
- 四、赤坂城軍事
- 五、櫻山四郎入道自害事

二

第一章は、元弘元年（一一三二）八月二十七日、後醍醐天皇が笠置に臨幸し本堂を皇居と定めたという、巻二・第七章（注）を受けた記述で始まる。「始一兩日ノ程ハ武威ニ恐レテ、参リ仕人獨モ無リケル」という状態であったが、「叡山東坂本ノ合戦ニ、六波羅勢打負ヌト聞ヘ」た事で、「當寺ノ衆徒ヲ始テ、近國ノ兵共此彼ヨリ馳參ル」と、好転する。ただ、その実態としては、「名アル武士」も、「手勢百騎トモ二百騎トモ、打セタル大名」も、一人も参集しないものであった。そのため「此勢許ニテハ、皇居ノ警固如何有ベカラシ」と危惧した後醍醐天皇が「少シ御マドロミ有ケル御夢」によって楠木正成が登場するのである。その夢の中に現れた二人の童子は、「一天下ノ間ニ、暫モ御身ヲ可レ被レ隠所ナシ」とした上で「但シアノ樹ノ陰ニ南ヘ向ヘル座席アリ。是御爲ニ設タル玉屐ニテ候ヘバ、暫ク此ニ御座候ヘ」と告げた。決して樂觀的な夢告げではなかったけれども、後醍醐天皇は「是天ノ朕ニ告ル所ノ夢也ト思食テ、文字ニ付テ御料簡アルニ」と、まず自分自身で夢解きをする。「木ニ南ト書タルハ楠ト云字也。其陰ニ南ニ向フテ坐セヨト、二人ノ童子ノ教ヘツルハ、朕再ビ南面ノ徳ヲ治テ、天下ノ士ヲ朝セシメンズル處ヲ、日光月光ノ被レ示ケルヨ」と、「自ら御夢ヲ被レ合テ、憑敷コソ被レ思食テレ」とあるように、自ら一つの解釈をし、その確認のために、夜が明けてから、成就房律師を呼んで「若此邊ニ楠ト被レ云武士ヤ有」と尋ねる。ここで、「楠」がまだ何者ともわからぬ段階で、「武

士」と断定している事は、「名アル武士」「大名」という条件に合わせたの夢解きであるとともに、強力な武力によってしか窮地を脱する事ができない厳しい状況下にあることを、天皇自身も認識しているという設定となっている事がわかる。巻二では、大塔宮の指示のままに行動するしかなかった後醍醐天皇であったが、京都を離れ、弥勒信仰の霊場として胎内くぐりの行場をも持つ笠置山に来る事によって、漸く意志的行動を持った「実像」として蘇生を果たしたと見ることができよう。

天皇の質問に対して、成就房は「近キ傍リニ、左様ノ名字付タル者アリトモ、未ニ承及ニ候」とした上で「河内國金剛山ノ西ニコソ、楠多門兵衛正成トテ、弓矢取テ名ヲ得タル者ハ候ナレ」と個人名を出し、正成が「敏達天王四代ノ孫、井手左大臣橘諸兄公ノ後胤」であること、「其母若カリシ時、志貴ノ毘沙門二百日詣テ、夢想ヲ感ジテ設タル子」であることを説明する。大軍の援助を期待できない後醍醐天皇を支えて、幕府方の圧倒的な数の多きと対抗できる存在として、その超人性こそが必要とされたことを意味する説明である。

「弓矢取ル身ノ面目、何事力は是過シ」と「是非ノ思案ニモ不レ及先忍デ」笠置に駆けつけた正成は、「東夷近日ノ大逆」については「天誅ヲ被レ致ニ、何ノ子細カ候ベキ」と述べ、「天下草創ノ功ハ、武略ト智謀トノ二ニテ候」と語り、「合戦ノ習ニテ候ヘバ、一旦ノ勝負ヲバ必シモ不レ可レ被レ御覽。正成人未ダ生テ有ト被レ聞召候ハ、聖運遂ニ可レ被レ開ト被レ思食候ヘ」と「頼シゲニ」述べて河内へ帰って行く。神の申し子として紹介された正成の、天皇支援の方

策が「武略ト智謀」という形で呈示されるものの、その実践については描かれず、正成自身が笠置合戦に出陣するわけでもない。

三

第二章は六波羅方に目を転じる。「主上笠置ニ御坐有テ、近國ノ官軍付隨奉ル由」の情報キャッチした六波羅方は、即座に十万余騎を集結させた。ところが「明日二日巳刻ニ押寄テ、矢合可レ有テ定メタリケル其前ノ日」つまり九月一日に拔懸けを狙った高橋又四郎が失態を演じる。

高橋が「獨リ高名ニ備ヘントヤ思ケン」一族三百余騎で攻め寄せたのに対し、「城ニ籠ル所ノ官軍」の方は「サマデ大勢ナラズト云ヘドモ、勇氣未レ怠、天下ノ機ヲ吞デ、回天ノ力ヲ出サント思ヘル者共」三千余騎が高橋勢を圧倒する。木津川に追い落とされたり、武器を捨てて素裸で京都へ逃げのぼった高橋勢については、「見苦シカリシ有様也」と描かれ、「是ヲ惡シト思フ者ヤシタリケン」として、平等院の橋詰に立てられた落首の事も付記される。更に「高橋ガ拔懸ヲ聞テ、引バ入替テ高名セント、跡ニ續」いたものの、やはり敗走してしまった小早河についても、「又私ヲ立副」られたとして落首を紹介している。

六波羅軍の方は、山門の動きも警戒して大津方面を準備させるという素早い対応を見せながら、局地的合戦に於ては、「高名」を狙った高橋・小早河らのために、緒戦での敗北を喫してしまった。この敗北によって、六波羅方は、天皇方に「國々ノ勢馳参リテ、難儀

ナル事モコソアレ、時日ヲ不レ可レ移」と、九月二日、七万余騎の大軍で笠置山を包圍する。^(注6)

三百余騎の高橋勢を三千余騎で敗走させた官軍も、九月三日、七万余騎の大軍に攻められては動きようがない。そして、ここで初めて笠置城の様子が紹介される。「彼笠置ノ城ト申ハ、山高シテ一片ノ白雲峯ヲ埋ミ、谷深シテ萬仞ノ青岩路ヲ遮ル。攀折ナル道ヲ廻テ揚ル事十八町、岩ヲ切テ堀トシ石ヲ疊デ屏トセリ。サレバ縦ヒ防ギ戦フ者無トモ、輒ク登ル事ヲ得難シ。」この描写は外側からの視線で捉えたものでありながら、六波羅軍の視点での記述ではない。そのため、必ずしも大軍だからと言う事で落城させやすいものではない事が暗示される。

鳴りを静める城中に対して「敵ハヤ落タリト心得テ」——つまり誤算をして、七万余騎は二王堂の辺まで攻め寄せる。ところが、官軍は「錦ノ御旗ニ日月ヲ金銀ニテ打テ着タルガ、白日ニ耀テ光リ渡リタル其陰ニ、透間モナク鎧フタル武者三千余人」が「甲ノ星ヲ耀シ、鎧ノ袖ヲ連テ、雲霞ノ如クニ並居」て、方々に待機する「射手ト覺シキ者共」が「弓ノ弦クヒシメシ、矢束解テ押甘、中差ニ鼻油引テ待懸」ており、「其勢決然トシテ、敵テ可レ攻様ゾナキ」という状況であった。

動けなくなった六波羅軍の前に、まず足助次郎重範が現れ、荒尾九郎を射殺し、更にその弟の弥五郎をも「胡籙ヨリ金磁頭ヲ一ツ拔出シ、鼻油引テ」十二束三伏ノ矢で射殺してしまう。この重範の活躍をきっかけとして本格的な合戦となり、次の場面では「本性房ト

云大力ノ律僧」が「尋常ノ人ノ百人シテモ動シ難キ大磐石ヲ、輕キト脇ニ挟ミ、鞆ノ勢ニ引欲々々、二三十ツドケ打ニ」投げ、寄手に多数の死傷者を出させた。

そのため「寄手雲霞ノ如シトイヘドモ、城ヲ攻ント云者一人モナシ。只城ノ四方囲メテ遠攻ニコソシタリケレ」という状態となる。官軍にとつては三千余騎でも「雲霞ノ如クニ並居タリ」と肯定的に記された表現が、六波羅軍には「雲霞ノ如シトイヘドモ」と、数の多さをプラスの方へ転じる事ができぬものとして捉えられている。この「遠攻」が六波羅方の意識的な持久戦であった場合には、官軍も追いつめられたかも知れないが、この場面では、そうではなかった。むしろ、十一日に河内よりの早馬による楠木正成の挙兵、十三日に備後よりの早馬による桜山四郎入道の挙兵と、六波羅方にとつてはマイナスの情報が続け様に届いたため、「六波羅ノ北方駿河守」は「日々ニ早馬ヲ打セテ東國勢」の出勤を要請する。数では官軍を圧倒しつつも、正成が言うところの「武略」(足助重範と本性房のために攻めあぐねていた六波羅軍であった。すなわち官軍優勢のまま、笠置合戦は動きを停止した状態になっていた)のである。この状態を打開すべく動いた東國勢は「二十萬七千六百余騎」であった。

ところが、この大軍の力によってではなく「備中國ノ住人陶山藤三義高・小見山次郎某」の一族の決死の活動によって、笠置は落城する事となる。陶山達は今までの敗北を反省した上で、「日本國ノ武士共ガ集テ、數日攻レドモ落シ得ヌ此城ヲ、我等ガ勢許ニテ攻落シタランハ、名ハ古今ノ間ニ雙ナク、忠ハ萬人ノ上ニ可レ立」とし

て、五十余人の一族若党で「皆千ニ一モ生テ歸ル者アラジト思切タル事ナレバ、兼テノ死ニ出立ニ、皆曼陀羅ヲ書テゾ付タリケル」という死を覚悟した姿で、激しい雨風の九月晦日の夜に攻め入る。屏風のような垂直の岩壁に行き当たった時も、「陶山藤三」が「岩ノ上ヲサラノト走上テ」、用意した熊手つきの差繩を木の枝にかけ「跡ナル兵共」を登らせ、城にたどりつく。皇居を探している時に「夜中ニ大勢ノ足音シテ、潛ニ通ハ怪キ物哉、誰人ゾ」と誰何されるが、「陶山吉次」がすぐ「是ハ大和勢ニテ候ガ、今夜餘ニ雨風烈シクシテ、物騒ガシク候間、夜討ヤ忍入候ハズラント存候テ、夜廻仕候也」と答え、追求をまぬがれる。その後は「忍タル體モ無シテ、「面々ノ御陣ニ、御用心候へ」ト高ラカニ呼ハツテ、閑々ト」本堂へ上り、皇居を探る大胆な態度さえ見せる。そして遂に僧坊に火を放ち、四方の寄手と呼応する形で官軍を攪乱させる。

「名」と「忠」とを重んじ、決死の覚悟で攻め込み、あるいは大胆に、あるいは細心に行動し、火を放つ前にも「鎮守ノ前ニテ一礼ヲ」する陶山達の態度は、正成の言う「武略ト智謀」を体現したものであり、その登場による戦況の逆転も十分首肯できるものである。

一方、今まで六波羅軍を寄せつけなかった官軍の方が「城内ニ大勢攻入タリト心得テ、物ノ具ヲ脱捨弓矢ヲカナグリ棄テ、ガケ堀トモ不レ謂、倒レ轉ビテソ落行ケル」という周章ぶりを見せてしまう。浮足立ってしまった官軍の中であって、巻一に描かれた討幕計画にも「潛ニ仰合ラレテ、サリヌベキ兵ヲ召ケル」時から参画していた

錦織判官代およびその一族が、奮戦して討死する。

四

第三章は、笠置炎上の中を脱出する後醍醐天皇にスポットライトを当てる形で、「忝モ十善ノ天子、玉體ヲ田夫野人ノ形ニ替サセ給テ、ソコトモ不レ知迷ヒ出サセ玉ケル、御有様コソ淺猿ケレ」と描く。「歩躑ナル體ニテ」「雨風烈シク道闇シテ、敵ノ時ノ聲此彼ニ聞ヘ」る中を、やがては「御手ヲ引進スル」のが「藤房・季房二人」のみという、この脱出劇は、天皇にとつての大きな受難であり、藤房との和歌の応答を含めて、涙を誘う哀切な口調で語られてはいるが、前述したごとく「実像」となった天皇は、決して涙を流してはいるのではない。

実際、山城国住人深須入道・松井藏人の二人に発見された折も、後醍醐天皇の「誠ニ怖シゲナル御氣色」での「汝等心アル者ナラバ、天恩ヲ戴テ私ノ榮花ヲ期セヨ」との言葉によって、「サシモノ深須入道」も「俄ニ心變ジテ、哀此君ヲ隱奉テ、義兵ヲ揚バヤ」と思ったほどであった。ただ、深須入道は松井藏人の同意が得られるかどうかわからない事もあって応諾はしなかった。この場面について、深須入道を「黙止ケルコソウタテケル」と批判的に描き、一方、「張興ノ怪ゲナル」に乗せられて「南都ノ内山」へ移送された天皇を「其體只殷湯夏臺ニ囚レ、越王會稽ニ降セシ昔ノ夢ニ不レ異。是ヲ聞是ヲ見ル人ゴトニ、袖ヲヌラサズト云事無リケリ」と同情的に描き、更に、ほぼ同時に生捕りとなった一宮ら「都合六十一人」が京

都へ護送された様子を「其方様歎ト覺タル男女街ニ立並テ、人目ヲモ不レ憚泣悲ム、淺増カリシ分野也」と共感をこめて描いている。

十月二日、六波羅（北）探題常葉駿河守範貞は後醍醐天皇を宇治平等院へ移送。同日、鎌倉から宇治へと直行した大仏貞直・金沢貞将が光厳天皇（量仁親王）への三種の神器の護渡を要請した。ところが、後醍醐天皇は、その申し出を藤房を通じて拒否する。まず「三種神器ハ、自レ古継體君、位ヲ天ニ受ケサセ給フ時、自ら是ヲ授奉ル者也。四海ニ威ヲ振フ逆臣有テ、暫天下ヲ掌ニ握ル者アリト云共、未此三種ノ重器ヲ、自專シテ新帝ニ渡シ奉ル例ヲ不レ聞」とした上で、内待所は笠置に捨てたこと、神璽は山中で迷った折に木の枝に懸け置いたこと、宝剣は武士が我が身に近付いたら自害するためのものだから手放せないこと、を述べたため、二人の東使も範貞も「言バ無シテ退出」せざるをえなかった。

更に、翌日「龍駕ヲ廻シテ六波羅へ成進ラセ」ようとしたところ、「前々臨幸ノ儀ナラデハ還幸成マシキ由ヲ、強テ被ニ仰出」た事で、幕府方も「無レ力鳳輦ヲ用意シ、袞衣ヲ調進シ」たため、「三日迄平等院ニ御逗留有テ」から漸く六波羅入りが実現した。

後醍醐天皇の囚われ人としての京都還幸については、やはり「見ル人涙ヲ流シ、聞人心ヲ傷シム」と同情的に描き、以下「悲乎昨日ハ紫宸北極ノ高ニ坐シテ、百司礼儀ノ妝ヲ刷ヒシニ、今ハ白屋東夷ノ卑キニ下ラセ給テ、萬卒守禦ノ密シキニ御心ヲ被レ惱。時移事去樂盡テ悲來ル。天上ノ五衰人間ノ一炊、唯夢カトノミゾ覺タル」と対句的表現によって慨嘆風に叙し、続けて、「遠カラヌ雲ノ上ノ御

「住居」の寂寥感を中宮（廉子）との和歌の応答によって哀切な形で描く。天皇からの和歌の中には「袖ハヌレケリ」「涙ユヘ半ノ月ハ陰ル」（後者は中宮からの和歌中の「拂ヒモアヘズカヽル泪ヲ」に対して）等の表現が見られるものの、後醍醐天皇の現実の落涙等が描かれているわけではない。つまり、この一連の哀調を込めた叙述は、作者の論理を重ね合わせた「見ル人」「聞人」という視点からのものなのである。

ところで、深須入道に対する態度にしても、三種の神器引渡しをめぐっての姿勢を見ても、「虚像」から「実像」へと再生した後醍醐天皇は、切迫した場面においても、むしろ極限状況の中でこそ毅然として、その存在感を明確にする。特に、三種の神器の引渡しを拒絶する際の論理は、詭弁そのものでありながら、幕府方を威嚇するものであり、そのため、京都還幸についても、幕府側は天皇の主張する条件を聞き入れざるをえなかった。現実には、十月八日に、逮捕者達の身柄の預け先が決定され、九日に三種の神器が光厳天皇に渡され、十三日に光厳天皇が即位のため長講堂から内裏へ入る、というように時間は進行して行き、「前帝奉公ノ方様」の不安感と「當今拜趨ノ人々」の満足感とが、「窮達時ヲ替榮辱道ヲ分ツ」と対照的に描かれ、「今ニ始メヌ憂世ナレドモ、殊更夢ト幻トヲ分兼タレシハ此時也」と要約される。

かつては、臣下達の犠牲（処刑）という形で幕府の追求を逃れる事のできた後醍醐天皇も、今や「前帝」として「今ニ始メヌ憂世」という現実を、身柄拘束の状態の中で認めざるをえなかったであろう。

う。しかし、やがて巻四で語られる隠岐配流に際しても、名目は「先帝」となりながら、実質としては「虚像」ではなく、「実像」として還幸の道をたどる後醍醐天皇である事が、この巻三の段階では確認できると言えよう。

五

第四章では、後醍醐天皇の前で「武略ト智謀」とを語った楠木正成の実戦が描かれている。ただ、笠置が落城し「如何ニモシテ、夜ノ内ニ赤坂城ヘト御心許ヲ被レ盡」ていた天皇達を救い出す事はしなかった点も含めて、この赤坂城の合戦の意味を考えなければならぬであろう。

六波羅からの要請により北条高時の命令に従って上京した東国勢は、「未近江國ヘモ入ザル前ニ、笠置ノ城已ニ落ケレバ、無念ノ事ニ思テ、楠木正成の立て籠る赤坂城へと向かう。その赤坂城は、
 ④「俄ニ誘ヘタリト覺テハカヽシク掘ヲモホラズ、僅ニ屏一重塗テ、方一二町ニハ過ジト覺タル其内ニ、僅ニ三十ガ程掻撥變ベタリ」（傍線筆者、以下同じ）と、傍線部分に象徴されるように、マイナス要素の多いものであった。そのため、攻撃する幕府方からは、
 ⑤「是ヲ見ル人毎ニ、アナ哀ノ敵ノ有様ヤ、此城我等ガ片手ニ載テ、投ルトモ投ツベシ。アハレセメテ如何ナル不思議ニモ、楠ガ一日コラヘヨカシ、分捕高名シテ恩賞ニ預ラント、思ハヌ者コソ無リケリ」と軽侮の目で見られ、「サレバ」「寄手三十萬騎ノ勢共」も「我前ニ打入ン」と争ったのであった。

一方、正成については、㉑「元來策ヲ帷幄ノ中ニ運シ、勝事ヲ千里ノ外ニ決セント、陳平・張良ガ肺肝ノ間ヨリ流出セルガ如ク者」と紹介され、㉒「究竟ノ射手ヲ二百余人城中ニ籠テ、舎弟ノ七郎ト、和田五郎正遠トニ、三百余騎ヲ差副テ、ヨソノ山ニゾ置タリケル」と、緻密な作戦が語られる。この、赤坂城についての状況把握が、マイナスの㉓㉔と、プラスの㉕㉖とでは、矛盾することになるが、㉓㉔は、㉕に続く「寄手ハ是ヲ思モヨラズ」という一文によつてもわかるように、幕府軍の錯覚であつた事を知れば、㉑㉒の「正成側にとつてプラス」という状況こそ現実なのであり、以後の合戦についての展望も予見されるわけである。以下、時間の経過を追いつつ両軍の動きを見てみよう。

別表(一)を見ると、幕府軍にとつて最も有効な戦法は、「食攻め」を目的とした「遠攻め」だつたことになる。従つて、たとへば㉗でも㉘でも、持久戦に持ち込む事ができる状況であつた。しかし、どちらの場合も、幕府軍の「実」よりも「名」を重んずる一所懸命の内情事情が、「遠攻め」を持続できずに攻撃をしかけては結局敗退を繰返すという結果をもたらした。

数で言えば問題にならぬほどの大軍で攻め寄せた幕府軍は、㉓㉔の錯覚(認識不足)が、㉕「案ニ相違」や㉖「思ノ外」で漸く確認されるものの、今度は楠木軍を警戒する躊躇が㉗㉘で見られ、一方、㉙では「彼赤坂ノ城ト申ハ、東一方コソ山田ノ畔重々ニ高シテ、少シ難所ノ様ナレ、三方ハ皆平地ニ續キタルヲ、堀一重塗タレバ、如何ナル鬼神ガ籠リタリ共、何程ノ事カ可有」という新しい錯覚

を持つてしまい、更に大軍であるゆえの動きにくさが、㉚㉛等に、マイナス面として露呈してしまう。

一方、楠木軍の方は、㉜に基づき㉝がそのまま㉞㉟㊱の実戦へと有機的に結びついて行き、㊲㊳㊴のような予想外の奇襲攻撃として展開されて行く。更に楠木軍ではないものの、㊵のような土地の人々は「徳」に結びつく意味で、幕府軍ではなく楠木軍の方に味方したと推測できるので(楠木正成自身がこのような人々を統括して戦つた事さえ充分考えられる)、幕府軍にしてみれば、空間的には「点」に過ぎぬような赤坂城への攻撃が、焦点の絞りきれない、茫漠たる圧迫感を与えるものであつたと考えられる。

さて、漸く㊶で幕府軍がやむをえず採つた「遠攻め」は、楠木軍には㊷というマイナス状況をもたらす。㊸に続く段落で「楠此城ヲ構ヘタル事暫時ノ事ナリケレバ、ハカクシク兵糧ナンド用意モセザレバ」と、楠木側の事情説明がなされている。正成はこのマイナス状況を打開するために、まず「節ニ當リ義ニ臨ンデハ、命ヲ可レ惜ニ非ズ」と建て、前を述べた上で「雖レ然事ニ臨ンデハ、謀ヲ好デナスハ勇士ノスル所也」と、現実直視の方へ論旨を転じ、「暫此城ヲ落テ、正成自害シタル體ヲ敵ニ知セン」という提案をする。しかも、「正成自害シタリト見及バズ、東國勢定テ悦ヲ成テ可三下向」。下らバ正成打テ出、又上ラバ深山ニ引入、四五度ガ程東國勢ヲ惱シタランニ、ナドカ退屈セザラン」と、決して弱気な発案ではない事も付言し、「是身ヲ全シテ敵ヲ亡ス計略也」と締め括っている以上、賛成しない者はなかつた。

城に「大ナル穴ヲ二丈許掘テ、此間堀ノ中ニ多ク討レテ臥タル死人ヲ二三十人穴ノ中ニ取入テ、其上ニ炭・薪ヲ積テ雨風ノ吹洒ケ夜」を待った。すると、④「正成ガ運ヤ天命ニ叶ケン」待望の夜が来る。そこで着火役一人を城に残し、⑤「皆物ノ具ヲ脱ギ、寄手ニ紛テ五人三人別々ニナリ」「閑々ト」落ちて行く。幕府軍の「長崎ガ厩ノ前」で見咎められた時、正成は「大將ノ御内ノ者」だが道に迷ったと述べ、⑥「足早ニ」通り過ぎようとした。ところが、「サレバコソ怪キ者ナレ、如何様馬盗人ト覺ルゾ。只射殺セ」と、矢を射掛けられてしまう。その矢は「正成ガ臂ノ懸リニ答テ、シタヽカニ立ヌ」と思われたにも拘らず、「ス膚ナル身ニ少モ不レ立シテ、箭ヲ返シテ飛翻」ってしまった。この事については、⑦「後ニ其矢ノ痕ヲ見レバ、正成ガ年來信ジテ奉レ讀觀音經ヲ入タリケル膚ノ守ニ矢當テ、一心称名ノ二句ノ偈ニ、矢崎留リケルコソ不思議ナレ」との説明が付けられている。こうして、正成が「必死ノ鎌ニ死ヲ遁レ、二十餘町落延」た頃に予定通り城は炎上、幕府軍側は勝鬨をあげ、「アマスナ漏スナト騒動」し、「焼静マリテ後」穴の中の多くの死骸を見て、⑧「アナ哀ヤ、正成ハヤ自害ヲシテケリ。敵ナガラモ弓矢取テ尋常ニ死タル者哉」と、全員で正成を嘗めた。

⑨に於て、幕府軍はプラス状況を掴む事ができたにも拘らず、正成の方が自軍のマイナス状況を決死の覚悟でプラスに転じたため、またしても⑩のような錯覚をしてしまい(但し、合戦時のように正成勢を軽く見ての錯覚ではなく、今回は正成を嘗める形での錯覚ではあったが)、結局、幕府軍は本当のプラス状況を手に入れる事は

できなかつた。

④で運が天命に叶って城を脱出した正成は、⑤で「閑々ト」落ちたにも拘らず、怪しまれて虚言で切り抜ける時には、⑥のように「足早ニ」通り過ぎようとした。この⑥から⑨へのちよつとした変化のために「サレバコソ怪キ者ナレ」と馬盗人ではないかとの疑いをかけられ、矢を射掛けられるという窮地を招いてしまう。この危機は観音靈驗譚の形で収拾されるが、考えてみれば、馬盗人としての疑いは晴れたわけではなく、矢による追求がそれ以上続けられたのかどうかの記述はなのまま、「不思議ナレ」という形で場面が転換してしまふ。結局、「武略ト智謀」の実行を初めて見せた正成を、「不思議」という説話的論理の中に一旦消化させ、その活躍の場後に残したと考える事ができよう。

卷三における笠置・赤坂の合戦については、大森北義氏に明解かつ詳細なる御論考がある。大森氏は、笠置合戦記について、A「一日から三日にわたる笠置官軍の勝ち軍」とC「晦日の笠置落城合戦」との間に、B「笠置とは直接関わらない正成らの挙兵と幕府大軍の発向を伝える」記事が挿入されている事に注目し、「すべての点で史実を虚構しているといえる」Bの記事が「反幕府運動の今後の展開についての伏線として、具体的には、この笠置合戦記と後の赤坂戦記をつなぐ主要な契機として、ここに叙述されている」と指摘した上で、「笠置落城、後醍醐天皇逮捕という決定的な挫折のうちに終幕を迎えたその後の赤坂合戦」について、『太平記』が「正成の一方的な勝ち軍を誇張し強調することで、挫折とは逆に、この後の

反幕府勢力の戦いに明るい希望さえ残している」と述べておられる。そして、「これは『太平記』が、この「変」を一時的な反乱として捉えるのではなく、後の元弘の戦乱へとつづく歴史変革の一過程として位置づけているもう一つの証しでもあるだろう」と、作品の構想に結びつけての鋭い分析を呈示しておられる。

大森氏がこの御論考の中で使っておられる正成の「虚像」という表現こそ、右に述べた「不思議」の中に消化されてゆく超人的・説話的正成像と重なるものであろう。

六

この短い第五章は、第二章の中でその挙兵が伝えられた（大森氏の言われるBの記事）桜山四郎入道が備後国を半ば制した段階で、①笠置落城・②楠木自害の情報が入ると、「一旦ノ付勢ハ皆落失ヌ。今ハ身ヲ離ヌ一族、年來ノ若黨二十餘人ゾ残りケル」という状態になったため、「人手ニ懸リテ戸ヲ曝サンヨリハトテ」妻子を殺し備後一宮の社壇に火を放ち、一族若党とともに自害して果てた、という記事からなる。

桜山が死んだ後、一宮を焼いた事情が語られる。備後一宮を深く信仰していた桜山は、「社頭ノ餘リニ破損シタル事ヲ歎テ、造營シ奉ラント云大願ヲ發シ」たものの、個人的には限界があるため「専此大願ヲ遂ンガ爲」に「今度ノ謀叛ニ與力」したのであった。ところが、①②によって大願達成が不可能と判断した桜山は（不可能になった事については「神非礼ヲ享給ハザリケルニヤ」との説明が付

けられている）、「其身ハ縦ヒ奈落ノ底ニ墮在ストモ、此願ヲダニ成就シナバ悲ムベキニ非ス」と、「勇猛ノ心ヲ發テ」焼身自害を遂げた。この桜山の死については「是モタノミハ不レ淺ゾ覺ヘケル」と、否定しない形で語られている。

幕府側には、その挙兵が脅威として受けとめられた桜山であったが、その実態は、①②の情報で簡単に四散してしまうような「一旦ノ付勢」によって構成されての「七百余騎」（第二章）だったのであり、何よりも桜山自身が、一宮社の修理造営のために天皇方として挙兵した事を知る時、「官軍」の名を与えられた後醍醐天皇方の軍事勢力が、必ずしも緊密な構成を持ったものではなかった事^{（金13）}が判明し、この事は又、巻一以来の実態^{（金14）}でもあった事も見えてくるのである。

七

ところで、巻一・巻二において顕著に見られた「対の方法」という視点から巻三を見た場合、人物形象に関して次のような「対」的構成を考えることができる。

- (1) 後醍醐天皇——楠木正成
- (2) 楠木正成——幕府軍
- (3) 陶山藤三——楠木正成
- (4) 桜山四郎入道——楠木正成

(1)の前提として、「巻二における後醍醐天皇（虚像）」と「巻三における後醍醐天皇（実像）」という「対」が考えられる事について

は既に述べた。その「実像」となった天皇の前に登場したのが楠木正成(注15)である。巻一の「無礼講」を含む討幕計画参画者の中には身分の高くない者も含まれていたが、正成の場合は複数の人物中の一人としてではなく、初めから「正成一人」という形で登場し、天皇に対しては、「民間ニ下テ年久シ」という付帯条件が記されながらも「敏達天王四代ノ孫、井手左大臣橘諸兄公ノ後胤」「其母若カリシ時、志貴ノ毘沙門二百日詣テ、夢想ヲ感ジテ設タル子」という修飾付きの説明がなされている。これは、隠岐配流までの短時間であるとは言え、「実像」として再生した後醍醐天皇を支えるのにふさわしい「対」的人物としての登場の仕方であると言えよう。

ここで、「敏達天王」「橘諸兄」の名が引かれていながら正成の父の名が語られない事の意味は、誠に象徴的である。毘沙門天の申し子である以上、父の名を明記しない方が自然であるとも考える事ができ、天皇を支えて孤軍奮闘する神話的存在としての正成像を物語っている。

(2)については、すでに赤坂城の攻防をめぐって詳しく見てきたが、確認の意味で考えておく。

赤坂城に立て籠った楠木勢は、もともと五百余騎であった。それに対して攻撃側の幕府軍は三十万騎という圧倒的な数字によって対照的であった。更に、「サシモノ大勢ナレドモ僅ノ敵ニ驚騒デ」「主被レ打ドモ從者ハ不レ知、親被レ打共子モ不レ助、蚰ノ子ヲ散スガ如ク」敗走した幕府軍が、「其道五十町ガ間、馬・物具ヲ捨タル事足ノ略

所モナカ」ったという事と、食攻めをされてとても勝てないと判断した正成が「皆物ノ具ヲ脱ギ、寄手ニ紛テ五人三人別々ニナリ」城を落ちて行ったのとは、事情は全く対照的なものである。鎌倉時代末期の武家組織の中で功名を意識しつつも馬や鎧を捨てて逃走せざるを得なかった幕府軍の武士達と、状況によっては鎧を脱ぐ事でも「寄手ニ紛」れるのも一つの作戦と考え、さしたる抵抗を覚えなかつた正成とでは、その形象の上で大きな「対」をなしていると言えよう。しかも、正成側にとっては「武略ト智謀」という表現によって、常に大義名分の説明が可能なものとなっている。

(3)、六波羅勢が大軍で押し寄せながら攻略できなかった笠置城を落城させたのは、備中国の住人陶山・小見山であった。巻三・第一章で登場した楠木正成は自分の考えを披露したのみで笠置から立ち去るため、第二章で正成の合戦ぶりが語られるわけではない。そして、正成の主張した「武略ト智謀」をまず実行に移したのは、反官軍方の陶山・小見山だったのである。彼らの「皆千ニ一モ生テ歸ル者アラジト思切タル事ナレバ、兼テノ死ニ出立ニ皆曼陀羅ヲ書テゾ付タリケル」という様子を見てもわかるように、笠置の緒戦や赤坂城攻撃の際に「錯覚」を繰返す幕府の大軍とは全く異なった描き方がされている。

従って、巻三全体から見た場合、大軍が攻めあぐむ笠置城を「目指トモ不レ知暗キ夜ニ、雨風烈ク吹テ面ヲ可レ向様モ無リケル」九月晦日に行動を起こした陶山・小見山は、大軍を翻弄した揚句、偽の自

害作戦を立てて「吹風俄ニ沙ヲ擧テ降雨更ニ篠ヲ衝ガ如シ。夜色窈溟トシテ甍城皆帷幕ヲ低ル」夜に城を脱出して行った楠木正成とは、作戦と実行という点で「対」的人物として形象されると考えてよいであろう。

なお、陶山・小見山の夜討ちについては、別表(2)のように諸本間に違いが見られる。玄玖本等の「陶山二郎高通」という名は、巻八で河野氏と共に活躍して備中守となった「陶山次郎」や、巻二十九に登場する「陶山又次郎高通」と合わせて考えるべきものであろう。又、垂直の岩壁という窮地を開いた人物「陶山藤三」についても、三本は陶山の「中間」とし、西源院本・玄玖本は「平五郎」という名も記している。この名についても、巻二十九で討死した「陶山又次郎高通」の弟に「又五郎」という類似した名前を見出すことができる。更に、敵(官軍)に見咎められた際にとっさに「夜廻仕候也」と答えた「陶山吉次」(この名は五本とも一致する)や、冒頭部分に名前が出ながら(その名については諸本間に少しユレが見られる)、その後、陶山との並列で姓が一度出るのみで、何ら具体的な活躍を見せない「小見山次郎」を含めて、むしろ「陶山一族の夜討ち話」という枠で考えるべきものかも知れない。更に、巻八の「陶山次郎」は「何トモナキ取集メ勢ニ交テ軍ヲセバ、怒ニ足纏ニ成テ懸引モ自在ナルマジ」と主張して、「サシ副」られた大軍を八条河原に残して百五十余騎で攻撃をし、味方であっても信頼できぬ隅田・高橋勢には、すぐに加勢しないで、暫く「見物」するような武士として描かれており、巻二十九に登場する陶山兄弟についても

「陶山元來軍ノ陣ニ臨ム時、假ニモ人ニ後ヲ見セヌ者ナレバ」と描かれていて、楠木像との重なりを窺う事ができる。

ところで、垂直岩壁に直面した場面を転換させるために陶山(あるいは中間)がとった行動を見ると、「屏風ヲ立タル如クナル岩石重テ、古松枝ヲ垂、蒼苔路滑ナリ、此ニ至テ人皆如何ントモスベキ様ナクシテ、遙ニ向上テ立タリ」という状況を、「岩ノ上ヲサラ／＼ト走上テ」打開したというのである。

『平家物語』(巻四「橋合戦」)の筒井淨妙明秀は「橋のゆきぎたをさら／＼さらとは走りわたる」という活躍を見せたが、垂直の岩壁を「サラ／＼ト走上テ」というのは、いかにも現実離れた描写である。ここは、「傳上テ→走上テ→サラ／＼ト走上テ」という風に変化したとも考えられるが、「サラ／＼ト走上テ」が「屏風ヲ立タル如クナル岩石」を意識せずに「岩ノ上ヲ」にのみ惹かれてしまった表現、という角度から考える事もできる。いずれにせよ、合戦等の活劇の場面における論理を超えた表現として、一応注意すべきものであろう。

この陶山・小見山の夜討ち話の冒頭箇所で、陶山藤三義高(陶山小見山かの明記はない)が一族の者達に向かって決意を促す場面がある。数日間の味方の攻撃について反省した上で「同ク死ヌル命ヲ、人目ニ餘ル程ノ軍一度シテ死タラバ、名譽ハ千載ニ留テ、恩賞ハ子孫ノ家ニ榮ン」と述べ、源平合戦の例を引用する。それが別表(3)である。『平家物語』で見ると、Bは巻九「一二之懸」、Cは巻九「二度之懸」、Dは巻十「藤戸」、Eは巻九「宇治川先陣」を、それぞれ

指しており、『平家物語』に従えば、E・B・C・Dの順序になる。

『平家物語』の中では、ある程度の分量を持った話が、このように短く要約され、しかもそこに、登場人物の行動についての解釈がなされている事は注目すべき事である。これらは、陶山自身の分析というよりは、やはり『太平記』作者が陶山に語らせたと見るべきであろうが、『平家物語』では巻の異なるDとEが、「佐々木三郎が」とした上で「同四郎高綱」という風に続けられている事は、そこに同姓として纏めようとした意識を窺うことができ、大系本・梵舜本と西源院本・玄玖本・義輝本とでの配列順序の違いとともに、『太平記』成立過程における「共通知識」としての『平家物語』が、作品構成の上でユニットの形で嵌め込まれていく姿を推測させるのはなからうか。

(4)、桜山四郎入道は、楠木正成と呼応しつつ後醍醐天皇を支援するはずの人物であった。しかし、楠木との緊密な連絡網もなかったであろう。それに先にも見たように、桜山の場合、一旦は「近國ノ逆徒等少々馳加テ、其勢既七百余騎」(備後よりの早馬で九月十三日に六波羅に届いた情報)という数を集めながらも、「笠置落城」¹「楠木自害」の報告が届くとともに四散してしまう脆い組織であった。そして、何よりも桜山自身の「御所方ニ參テ旗ヲ揚」た理由が、備後一宮の社殿修復造営という誠に地方的・私的なものであった。

従って、「弓矢取ル身ノ面目」と思い、「是非ノ思案ニモ不_レ及、先忍デ」笠置に駆けつけて「武略ト智謀」を論じ、赤坂城では奇襲

作想によって幕府軍を翻弄した楠木正成と、あつけない形で自害してしまつた桜山四郎入道とは、同じ天皇方とは言いながら、誠に対照的な形で描かれていると言わざるをえない。

あるいは桜山にも楠木と呼応して戦う場面があつたとすれば、正成における毘沙門天の申し子のような構想の中に、備後一宮に結びつく説話的なものが組み込まれたかも知れない。これらの事を考えても、もし楠木正成を大森氏の言われる「虚像」^(注18)と考えるなら、桜山四郎入道こそは官軍の中の一つの「実像」を顕現した人物と考え事ができるであろう。

鈴木登美恵氏は『太平記』における楠木正成が、お伽草子の主人公に通じる毘沙門天の申し子として登場し、作者の分身ともいふべき未来予見者の役割を与えられていることは、『太平記』作者と正成との距離の近さを物語るものといえよう」と述べておられるが、^(注19)夢という説話的契機を介して作品の舞台に登場した楠木正成は、特にこの巻三に於て、さまざまな形で「対」的構成をなす重要人物となつていると言えるであろう。

注

- 1 拙稿「『太平記』巻二における「対の方法」」(大阪樟蔭女子大学論集「第24号」)
- 2 「今昔物語集」巻十一第三十話。
- 3 「笠置寺縁起」

- 4 特にことわらない場合の本文引用は、全て日本古典文学大系本（岩波書店）による。
- 5 流布本（大系本）では巻二は十章から成る。
- 6 笠置合戦の進攻経路等については、安井久善氏が『太平記合戦譚の研究』（桜楓社・昭和56年10月30日刊）で分析しておられる。
- 7 玄玖本・義輝本は「範貞も舌ヲ振テ恐怖シ重テ申亥ハ無リケリ」と、天皇の迫力を強調して描いている。
- 8 玄玖本・義輝本は、それぞれの和歌の後に、解説風記述を載せている。
- 9 玄玖本・義輝本は、九日の記事がない。
- 10 西源院本「浮世」、玄玖本・義輝本「理」。
- 11 佐藤和彦氏の『自由狼藉・下剋上の世界』（小学館・一九八五年七月二五日刊）第九章など。
- 12 「合戦記の虚実―巻三の二つの合戦記について―」（鈴木登美恵・長谷川端『鑑賞日本の古典・太平記』尚学図書・昭和55年6月1日刊）
- 13 網野善彦氏は『異形の王権』（平凡社・一九八六年八月一八日刊）に於て、南北朝の動乱を「社会を統合する権威自体の構造の大きな変化と深く結びついた転換」としておられる。
- 14 拙稿『太平記』巻一における「対の方法」¹⁾（『樟陰国文学』第23号）でも言及したが、玄恵の文談を「忌思ケル」「愚ナ」²⁾る人々をも含む討幕計画であった。
- 15 正成については、長谷川端氏の『太平記の研究』（汲古書院・昭和57年3月31日刊）や中西達治氏の『太平記論序説』（桜楓社・昭和60年3月30日刊）にも傾聴すべき御論が収められている。
- 16 大系本による。
- 17 大系本（覚一本）による。
- 18 「太平記第一世界の構想について」（『太平記研究』第七号・昭和57年12月20日刊）。
- 19 『鑑賞日本の古典・太平記』（注12参照）

別表(1)

	楠木正成側	幕府軍側
(一)	<p>② 「樽ノ上、サマノ陰ヨリ、指ツメ引ツメ、鏃ヲ支テ射」る</p>	<p>① 「只一揉ニ揉落サント、同時ニ皆四方ノ切岸ノ下ニ着タリケル」</p> <p>③ 「時ノ程ニ死人手負千余人」</p> <p>④ 「案ニ相違」したため「攻口ヲ少シ引退キ」「皆帷幕ノ中ニ休居タリケル」</p> <p>⑤ 「敵カ味方カトタメラヒ怪ム處ニ」</p> <p>⑧ 「アキレテ陣ヲ成カナタリ」</p>
(二)	<p>⑤ 楠七郎・和田五郎は「遙ノ山ヨリ直下シテ、時刻ヨシ」と判断し「三百余騎ヲ二手ニ分ケ」「菊水ノ旗ニ流」を靡かせ「閑ニ馬ヲ歩マセ」押寄せせる。</p> <p>⑦ 三十万騎の敵陣の中へ「魚鱗懸ニ懸入、東西南北へ破テ通り、四方八面ヲ切テ廻ル」</p>	<p>⑩ 「大勢ナレドモ僅ノ敵ニ驚駭デ」周章し「蜘蛛ノ子ヲ散スガ如ク、石川々原へ引退ケ」</p>
(三)	<p>⑨ 城中より「三百余騎鋒ヲ雙テ打テ出、手崎ヲマワシテ散タニ射ル」</p> <p>⑪ 「東條一郡ノ者共」は捨てられた馬、物具によって、「俄ニ徳付テゾ見タリケル」</p>	<p>⑫ 「思ノ外ニシ損ジテ、初度ノ合戦ニ負ケレバ、楠ガ武略海リニクシトヤ思ケン」城の東方へ押寄せたものの攻撃はしなげず。</p> <p>⑬ しかし、一族に被害者の多かった本間・渋谷勢の決意によつて「我モ我モト馳向ケリ」城の様子を見て「何程ノ事カ可有」と侮つて「逆木ヲ引ノケテ打テ入」とする。</p>
(四)	<p>⑭ 「城中ニハ音モセズ」</p> <p>⑮ 「矢ノ一筋ヲモ不ニ射出、更ニ人有トモ見ヘ」ず。</p>	<p>⑮ 「昨日ノ如ク」になる事を懸念して、十万余騎を「後ノ山へ指向テ」、二十万騎で城を包囲する。</p>

原 表 (3)

<p>(六)</p> <p>⑲ 「城中ノ兵ハ、慰方モナク機モ疲レヌル心地シケレ」</p>	<p>(五)</p> <p>⑲ 「柄ノ一二丈長キ杓ニ、熱湯ノ湧翻リタルヲ酌デ懸」る。</p>	<p>⑱ 「本ヨリ屏ヲ二重ニ塗テ、外ノ屏ヲバ切テ落ス様ニ拵タリケレバ」四方ノ屏ノ釣縄ヲ一度ニ切テ落」す。</p> <p>⑳ 大木・大石を次々に投げかける。</p>
<p>⑳ 「今ハ兎モ角モ可レ爲ナクシテ、只食責ニスベシ」という事になり、己ガ陣々ニ櫓ヲカキ逆木ヲ引テ遠攻」にする。</p>	<p>㉑ 即死はしなかつたものの、二三百人が負傷する。</p> <p>㉒ 釣屏を警戒して、熊手で屏を引き「既ニ被引破」ヌベウ見ヘケル處ニ」</p> <p>㉓ 「兩日ノ合戦ニ手ゴリヲシテ」遠攻めにする。</p> <p>㉔ しかし、四五日経過して「後マデモ人ニ被レ笑事コソ口惜ケレ」と、今度は「持楯ヲハガセ、其面々ニイタメ皮ヲ當テ」攻め寄せる。</p>	<p>㉕ 「七百余人被レ討ケリ」</p> <p>㉖ 「寄手千余人、厭ニ被レ打様ニテ、目許ハタラク處ヲ」</p> <p>㉗ 「弥氣ニ乗テ、四方ノ屏ニ手ヲ懸、同時ニ上越ン」とする。</p>

別表(2)

中心人物	大系本 陶山藤三義高 小見山次郎某	西源院本 陶山藤三義高 小見山次郎	玄玖本 陶山二郎高通 <small>(在イ)</small> 小見山次郎氏真	義輝本 陶山ノ二郎高通 小見山次郎氏真	梵舜本 陶山藤三義高 小見山次郎々々				
垂直の岩を登る	陶山藤三 岩ノ上ヲサラく ト走上テ	陶山カ中間ニ平五 郎ト云者有ケルカ 岩ノ上ヲサラく ト走上テ	陶山ガ中間ニ平五郎ト 云者有ケルカ <small>(在イ)</small> 岩ノ上ヲ傳へ上テ	陶山カ中間ノ有ケルカ 岩ノ上ヲ傳上テ	陶山藤三 岩ノ上ヲ走リ上テ				
敵の陣中を偵察	陶山 小見山	陶山 小見山	陶山 小見山	陶山 小見山	陶山 小見山				
敵陣で嘘言	陶山吉次	陶山吉次	陶山吉次	陶山吉次	陶山ノ吉次				
皇居を偵察	陶山 陶山カ五十余人ノ 兵共	陶山 陶山五十餘人之兵	陶山 陶山カ五十余人ノ兵 トモ	陶山 陶山カ五十余人ノ兵 トモ	陶山 陶山カ五十餘人ノ 兵共				
火を放つ	陶山カ五十余人ノ 兵共	陶山五十餘人之兵	陶山カ五十余人ノ兵 トモ	陶山カ五十余人ノ兵 トモ	陶山カ五十餘人ノ 兵共				

イ 「陶山二郎高通」の「二郎」「通」を消し「藤蔵義」と傍書する。
 ロ 「陶山ガ」の「陶山」と「ガ」との間に「藤蔵」を傍書する。

別表(3)

	大系本					
F	E	D	C	B	A	
<p>此等ヲダニ今ノ世迄語傳テ、名ヲ天下ノ人口ニ殘スゾカシ。</p> <p>同四郎高綱ガ宇治川ノ先陣ハ、イケズキ故也。</p> <p>佐々木三郎ガ藤戸ヲ渡シ、ハ、案内者ノワザ、</p> <p>梶原平三ガ二度ノ懸ハ、源太ヲ助シ爲ナリ。</p> <p>熊谷・平山ガ一谷ノ先懸ハ、後陣ノ大勢ヲ憑シ故也。</p>						
F	C	B	E(注ニ)	D(注ハ)	A	西源院本
F	C	B	E	D	A	玄玖本
F	C	B	E	D	A	義輝本
F	E	D	C	B	A	梵舜本

ハ 「佐々木三郎」の「三郎」なし。
 ニ 「同四郎高綱」なし。